

# 美容整形への抵抗感の構造

○松下戦具<sup>1</sup>

(<sup>1</sup>大阪樟蔭女子大学学芸学部化粧ファッション学科)

キーワード：美容整形，抵抗感，侵襲

Structure of antipathy toward aesthetic surgeries

Soyogu Matsushita<sup>1</sup>

(<sup>1</sup>Department of Beauty and Fashion Studies, Osaka Shoin Women's University)

Key Words: aesthetic surgery, antipathy, invasion

いわゆる美容整形の何がいけないのだろうか？美容整形は年々普及している一方で、まだ多くの人々はそのような施術に対して否定的な感情を持っているようである。このような議論の多くにおいて、「親からもらった体だから」、「不自然だから」など様々な理由が挙げられる。しかし、結局のところその抵抗感の正体ははっきりしないままである。

これまでも、美容整形をめぐる社会学的な研究はなされている（例えば川添，2013）。しかし、美容整形に喚起される否定的な感情を詳しく調べた心理学的な実証研究はほとんどない。本研究では、美容整形に対する抵抗感を構成する要素を明らかにするために質問紙調査を行った。

## 方法

**研究対象** 対象者は、大学生および大学院生 87 名（全員女性）であった（うち 2 名は欠損値のため分析には含めなかった）。**質問紙** 質問紙は 2 つのパートで構成された。第 1 のパートには、美容整形に反対する具体的な理由 20 項目が記載されていた（「外見にこだわるのはばかげている」「副作用が心配だ」など）。回答者は、それぞれの項目が自分の意見にどの程度あてはまるかを「全くそう思わない」から「非常にそう思う」の 7 件法で答えた。このパートの項目は、Web 上の約 200 のサイトから収集・整理されたものであった。

第 2 のパートは、美容整形に対する包括的な抵抗感の強さを測る質問項目であった。すなわち、「〇〇が美容整形外科手術を受けることに関して、あなたは心理的抵抗をどの程度感じますか」という質問で、「〇〇」の部分が、「あなた」、「あなたの友人」、あるいは「あなたととくに接点の無い人」が書かれた 3 問であった。回答者は、それぞれの項目に「全く感じない」から「非常に感じる」の 7 件法で答えた。質問項目の順序効果を軽減するため、質問順が各パート内で異なる 4 つのバージョンが作成された。

**手続き** 対象者は集団で教示を受けたのち、一斉に回答した。全ての回答者は第 1 パートの後で第 2 パートに回答した

## 結果

初めに、美容整形に反対する理由を因子分析した。因子数はカイザー・ガットマン基準で 6 とし、バリマックス回転で得られたモデルを採用した ( $\chi^2(85) = 100.55, p = .12$ )。抽出された因子はそれぞれ、「道徳的信念」「身体的な害への不安」「ばれたときの不都合」「効果の軽視」「独自性喪失」「後遺症の心配」と命名された (Table 1)。

次に、第 2 パートの包括的な抵抗感の強さを目的変数、5 つの因子得点を説明変数として、標準化した重回帰分析を行った。その結果、他人が施術を受けるときの抵抗感は  $.36$  道徳\*\* +  $.08$  身体害 +  $.04$  ばれ -  $.12$  軽視 -  $.01$  独自 -  $.07$  後遺 +  $.00$  ( $R^2 = .146, F(6,78) = 2.226, p = .04$ ) であった。友人が施術を受けるときの抵抗感  $.37$  道徳\*\*\* +  $.14$  身体害 +  $.23$  ばれ\* +  $.07$  軽視 +  $.10$  独自 +  $.12$  後遺 +  $.00$  ( $R^2 = .270, F(6,78) = 4.796, p = .0003$ ) であった。さらに、自分が施術を受けるときの

抵抗感  $.30$  道徳\* +  $.42$  身体害\*\*\* +  $.18$  ばれ\* +  $.13$  軽視 +  $.20$  独自\* +  $.02$  後遺 +  $.00$  ( $R^2 = .398, F(6,78) = 8.588, p < .0001$ ) であった。

Table 1

5 つの因子の分散説明率と代表的な項目。

<b>道徳的信念</b> (7 項目；説明率 17.2%)
親からもらった体に傷を付けるのは良くない
人をだますことになるので良くない
<b>身体的な害への不安</b> (6 項目；説明率 14.4%)
副作用が心配だ
身体的なダメージが大きく危険だ
<b>ばれたときの不都合</b> (2 項目；説明率 8.1%)
ばれたときに周囲の人が対応に困るから良くない
周囲にばれて冷ややかな目で見られるのが良くない
<b>効果の軽視</b> (3 項目；説明率 6.7%)
外見にこだわるのはばかげている
施術したところで大して変わらないから無駄だ
<b>独自性喪失</b> (1 項目；説明率 5.3%)
皆が同じような見た目になるから良くない
<b>後遺症の心配</b> (1 項目；説明率 5.0%)
後遺症が心配だ

## 考察

因子分析の結果は解釈が容易で、5 つの因子の中でも特に重要なのは、道徳的信念（第一因子）と身体的な害への不安（第二因子）である。道徳的信念は、親、宗教、文化などにより後天的に学習されるものあり、それは自己の外部に由来する客観的基準である。一方の身体的な害への不安は、身体侵襲や未知への原始的恐怖であり、それは自己の内部に由来する主観的基準である。

美容整形への抵抗感を論ずるには、誰が施術を受けるのか、という視点が不可欠である。結果では、見知らぬ他人が美容整形を受けることへの抵抗感に影響したのは道徳的信念因子だけであった。一方で、自己が施術を受けることへの抵抗感にはほかの因子も影響し、特に強く影響したのは身体的な害への不安因子であった。一般に美容整形を否定する意見の根拠として道徳的規範が頻繁に引き合いに出されるのは、それが身体侵襲への恐怖よりも多くの人に適用できるからであろう。それと同時に、他者の身体侵襲に恐怖を覚えるのは過剰な自己投影だと判断したとき、その不快感を道徳的信念に帰属させ、正当化している可能性も指摘できる。

## 引用文献

川添 裕子 (2013). 美容整形と〈普通のわたし〉 青弓社